彙　報

一九九九年　一月より
一九九九年一二月まで

班研究

唐宋美術の研究

班長　曾布川　寛

一九九五年四月から五ヶ年計畫で始まった本研究は、隋・唐・五代・北宋の美術全般についてより精確な理解を目指す。特に繁榮の極に達した盛唐美術を中心に、初唐からそこに至った過程、またそこから一轉して寫實的な山水・花鳥畫に代表される宋代美術を生むに至った背景などを探る。具體的な方法としては出土・傳世の文物、石窟寺院の佛教美術、畫論・書論の藝術論を三本の柱として、發表と會讀を交えて進めていく。本年の發表は以下の通り、藝術論の會讀は黃休復『益州名畫錄』（宇佐美文理擔當）、黃伯思『東觀餘論』（下野健兒擔當）を取り上げた。また松本伸之氏を招き發表していただいた。

一月二五日　小南海石窟と僧稠禪師　稲本　泰生
二月　八日　初唐の阿彌陀圖像　岡田　健
三月二二日　八世紀初めにおけるジャンルとしての山水畫の成立　白　適銘
三月二七日　陝西・河南・山西の唐代文物　松本　伸之
五月一〇日　二世紀末―五世紀初頭の遼寧省における壁畫墓についての一考察―墓主人の圖像を中心として　傅　江
六月　七日　インド後期佛教石窟と三つの王朝（承前）―アジャンター壁畫の新知見・新解釋を含めて　定金　計次
六月二八日　宋代青綠山水畫研究（二）　竹浪　遠
九月二七日　楡林窟第三窟の山水表現について　趙　聲良
一〇月一八日　宋元時代の顏眞卿　宮崎　洋一
一〇月二五日　八世紀山水畫風に關する再檢　白　適銘
一一月　一日　八―十世紀の舍利埋藏形式　沈　雪曼
一一月　八日　唐昭陵新城公主墓について　傅　江
一一月二二日　北齊崔芬墓初考　林　聖智
一二月一三日　中國美術の畫像處理　宇佐美文理

譯經僧傳研究

班長　桑山　正進

譯經僧とは、インドや中央アジアから中國にやってきて、經典漢譯に參劃した佛教僧である。かれらに關する情報は『高僧傳』『續高僧傳』『宋高僧傳』などに編纂されている。これらの傳記を班員の專門分野である歷史、言語、宗教、美術など多角視點をもって讀解檢討し、四世紀―八世紀の、中央アジアから南アジアにわたる地域の歷史、文化、その他おおくの情報を引き出すことを目的とする。あわせて據るべき現代語譯を作成する。研究會は一九九六年四月から二〇〇一年三月まで隔週の月曜日（二時―五時）に文獻センター會議室で開催。

十六・十七世紀アジアにおける言語接觸

班長　高田　時雄

本研究班ではポルトガル勢力のアジア東漸を契機として起こった言語接觸の諸相を、ジェズイットを初めとするカトリック諸會派の資料を中心として解明することを目指す。現在はマニラのドミニコ會が一五九三年に刊行したタガログ語版ドチリナを中心とし、同じくマニラ刊の中國語版、さらに日本キリシタン版、ポルトガル語版、スペイン語版などを參照しつつ、會讀を行いつつある。

中國技術の傳統

班長　田中　淡

「中國技術史の研究」に引き續いて、一九九六年から五年間の計畫で、中國技術の傳統と特質について檢討を加えてゆく。基本的には生活科學技術を中心とするが、しかし前研究班の過程で朧げながらみえてきた中國技術史における研究課題

は、特定の時代、分野に偏重しない。一般的には、技術と科學の相關、技術者と社會、生活科學の特質、少數民族の技術、等々の主題に關わるであろうし、個別的には、農業、醫學、土木建築、紡績、數學、天文學、化學、その他の領域に擴がるであろう。會讀のテキストとしては、引き續いて元・王禎の『農書』農器圖譜の譯注作成をすすめてゆく。竝行して、技術史の諸分野にわたる班員の研究發表を隨時おこなう。

標記の期間に、王禎『農書』農器圖譜・蠶桑門、織紝門、續絮門の譯注を、福田美穗、佐藤實、山花哉夫、東郷俊宏が擔當した。また左の研究發表がおこなわれた。

一月二六日　隋唐時代の身體觀　白杉　悅雄
二月　九日　草創期の茶寘　關　劍平
四月二〇日　隋唐琵琶雜攷　外村　中
五月一一日　後趙鄴都の庭園　村上　嘉實
五月二五日　科學史、醫學史の新研究法　Nathan Sivin
一〇月一二日　元大都の宮殿計畫とその造營　福田　美穗
一〇月二六日　黔江地區土家族の農業と農具―スライド併映―　渡部　武
一一月　九日　中國一六―一七世紀の輸出用染織品について　吉田　雅子
一一月三〇日　明末北京米萬鍾勺園考析　李　樹華

中國の禮制と禮學　班長　小南　一郎

本研究班では、前年に引き續き、續漢書禮儀志の帝王の年中行事に關する部分を、劉昭注を含めて讀み、譯注を付けた。續漢書のこの部分は、後漢書に收められて、正史の一部を成しているのであるが、テキストに亂れが多く、讀みにくい個所が續出する。こうしたテキストであればこそ、會讀の對象とするに相應しいと言えるのかも知れない。

本讀みと並行して、班員による、次のような研究報告が行なわれた。

一月二六日　漢代の祭酒　東　晉次
二月一六日　性卽氣―中庸の背景―　末永　高康
五月二四日　郭店楚簡儒書和先秦儒學研究　陳　來
六月二二日　釋奠禮と義疏學　古勝　隆一
一〇月二六日　足利學校釋奠禮と韓國宗廟儀禮のヴィデオ　説明　矢木　毅
一一月三〇日　望山一號墓竹簡の復元　淺原　達郎

唐代宗教の研究　班長　吉川　忠夫

論文集を完成させるため、一月から七月にかけて、下記の研究報告を行った。九月以降は、『北山錄』の會讀を再開し、卷六・卷七の譯注稿の作成を、古勝隆一・坂內榮夫・深澤一幸・松村巧・礪波護が擔當した。

一月一三日　白居易と宗教　蜂屋　邦夫
一月二七日　山谷寺湛然と大福先寺湛然　陳　金華
二月一〇日　譚峭『化書』について　秋岡　英行
唐代の死者世界のイメージと死者供養　松村　巧
二月二四日　新舊唐書における釋氏と老氏について　藤井　京美
四月二八日　李商隱と佛教　深澤　一幸
五月一二日　『神仙傳』と唐代道教　龜田　勝見
五月二六日　『占察善惡業報經』の成立と傳播について　池平　紀子
唐代における「聖人」像　小笠　智章
六月　九日　唐初の道教思想　神塚　淑子
六月二三日　道教教團の戒律について　都築　晶子
唐代道教における心學について　坂內　榮夫
七月　七日　貫休の詩　釜谷　武志

周氏冥通記研究　班長　麥谷　邦夫

本研究班は、吉川忠夫教授を班長とする「六朝道教の研究」研究班による『眞誥』譯注作業の終了を承け、同じく梁陶弘景の編纂になる『周氏冥通記』四卷の譯注作成を主目的として、一九九八年度より二年間の豫定で活動を開始した。本年度は第四卷まで讀了し、現在譯注原稿の整理を進めている。なお、本研究班は豫定どおり本年度をもって終了する。

文獻と情報　班長　勝村　哲也

研究會の構成は、前年どおり、文獻班と情報班

に分かれる。本年は最終年度なので、研究報告の取りまとめを行うことになり、情報班は、安永尚志、柴山守、桶谷猶久夫、星野聰の四氏と勝村が論集の編集にあたり、文獻班は、論集作成を目指して下記の報告を行った。なお、建仁寺兩足院の調査は、慶應義塾大斯道文庫、筑波大岩崎宏之重點領域研究「沖縄の歴史情報」、勝村哲也基盤研究「朝鮮渡來漢籍の研究」との共同事業として所期の目的を終了した。今後は京都五山の本格的な調査をまって、完備した目錄が編纂されることを望みたい。

一月二九日　本邦古傳の『孝子傳』について　山崎　誠

二月一二日　明清時代の檔案史料について　谷井　陽子

四月二三日　六朝期の目錄について—六部分類から四部分類へ　金　文京

五月　七日　任昉「述異記」について　中島　長文

五月二一日　再雕本高麗藏に關する二・三の問題　梶浦　晉

六月　四日　西南中國の西番諸語の歴史と現在　池田　巧

六月一八日　琉球における漢籍の收集について　高津　孝

七月　二日　敍錄と自序　池田　秀三

一〇月　八日　日本傳存老子道德經の書き入れ　古勝　隆一

一〇月二三日　その後の『經典釋文』　木島　史雄

一一月　五日　朝鮮本の刊地・刊年決定法試論　藤本　幸夫

一一月一九日　元朝の科學資料について　森田　憲司

一二月　四日　東禪寺版『下州千葉寺了行』とその周邊　牧野　和夫

邊境出土木簡の研究　班長　冨谷　至

三年計畫を一年延長し、本年度で敦煌馬圈灣出土の木簡をすべて會讀した。現在、注釋原稿の整理を行っている。また、これと並行して班員各位の研究發表を行い、相互の批判・檢討を通して、簡牘資料に對する古文書學的・歴史學的な理解を深めあった。こちらも現在、論文集の刊行を準備中である。なお、二月十九日には早稲田大學の工藤元男教授をお招きし、「楚簡研究とデータベース」と題して講演をうかがった。

班員各位による研究發表の題目は下記のとおり。

一月二九日　西域關連文書をめぐって　角谷　常子

三月　五日　前漢末の西域政策よりみた馬圈灣漢簡—D二一遺跡とは何か—　鵜飼　昌男

四月三〇日　漢代の武庫—尹灣簡牘を例に—　杉本　憲司

五月二一日　高麗國初の廣評省と內議省　矢木　毅

六月一八日　S九四七八「地志」殘片について　辻　正博

七月一六日　漢簡に見える社文書　竺沙　雅章

九月一七日　「簡牘檢署考」について　井波　陵一

一〇月一五日　敦煌簡の亭　冨谷　至

一一月一二日　漢代の官印—官僚機構におけるその使用に關して—　米田　健志

一二月一七日　懸泉遺址と懸泉簡牘　柴　生芳

中國共產主義と日本—思想・運動・戰爭—　班長　狹間　直樹

現在の中國が中國共產黨の支配する「共產主義」の國家としての中華人民共和國であることは、明白な事實である。中國近代史の一つの歸結としてこの中華人民共和國の誕生にいたる經過を振り返るには、二十世紀において獨特の歴史現象として出現した世界の共產主義との關連でとらえねばならぬことは言うまでもないとして、そのさい東アジアにおける日本（朝鮮を含め）との密接なかかわりの探求がとりわけ必要とされるのである。本研究は、中國共產主義のありようを日本との關連において、思想・運動・戰爭の諸側面から迫ろうとするものである。

一月二二日　『嚮導』にみる〝中國共產黨人〟のアジア觀　蔣　海波

二月　五日　近代中國における日本に對するアンビバランスの解消—進化論

からマルクス主義へ・アジア主義からプロレタリア國際主義へ　李　惠京

四月二三日　曹如霖等三高官「罷免」をめぐる日本と中國の對抗—中國〝過激派〟の歴史的位置—　狹間　直樹

五月　七日　國共合作の崩壞とソ連・コミンテルン—スターリンの「五月指示」をめぐって—　石川　禎浩

五月二一日　中國共產黨の文藝政策と聞一多　楠原　俊代

六月　四日　賀川豐彦と中國　濱田　直也

六月一八日　五四時期の中國と日本の思想狀況—コスモ倶樂部を手がかりに　小野　信爾

七月　二日　『胡景翼』日記讀解—民國期の軍事世界　松尾　洋二

九月二四日　彼女が髪を切った理由—一九二〇年代、女子剪髪と「革命」的身體　高嶋　航

一〇月　八日　中國共產黨と日本帝國主義—東北勞働運動を中心に　江田　憲治

一〇月二二日　古田會議から富田事件へ　緒形　康

一一月一五日　日本と中國における共產主義教育の理念と實態—一九三〇年代初期の場合　中島　勝住

一一月二六日　陳獨秀・李大釗に見る日本に對するアンビバレンスの解消　李　惠京

一二月一〇日　汪精衞南京政府下の學校と青少年をめぐって　柴田　哲雄

中國近代化の動態構造　班長　森　時彦

近代における中國文明と西洋文明の接觸が中國の社會構造にいかなる變動をもたらしたかという問題を、政治・經濟・文化などさまざまな專門分野から多角的に考察することが、このプロジェクトの課題である。本年度は、都市と農村の關係という先行の研究班のテーマを受けて、都市や農村の問題に焦點を當てた報告が多かった。中國固有の都市農村構造のなかで近代化が如何に進行し、これを變容させて行ったか、そのプロセスの解明が一つの軸になっている。

一月二九日　中國の工業化と城鄉關係　森　時彦

二月一二日　中國農村の近代化過程　川井　悟

四月三〇日　キリスト教受洗者と近代廣東東部の歴史　蒲　豐彦

五月一四日　清代の賦役全書　高嶋　航

五月二八日　田賦徵收機構とその歴史的淵源　岩井　茂樹

六月一一日　一九三〇年代の上海勞働運動　江田　憲治

六月二五日　海派小說における外國人　濱田　麻矢

一〇月　一日　近代朝鮮の穀物流通構造—二〇世紀初頭の咸鏡北道の例から　石川　亮太

初期出使大臣の派遣とその性格について　箱田　惠子

一〇月一五日　定縣における合作社事業　袁　廣泉

一〇月二九日　「自梳女」たち・死後祭祀・宗族制度　片山　剛

一一月一二日　廣東における商民運動と廣東商界　陳　來幸

一二月　三日　八〇年代の大都市制度改革　三宅　康之

帝國の研究　班長　山本　有造

冷戰の終了、ソ連邦の崩壞とともに、諸民族・諸地域の間に遠心力が强まり、民族とは何か、國家とは何かがいま新たに問われはじめている。「民族自決に立脚した國民國家」という近代的理念の妥當性が再檢討されるなかで、「帝國」という國家統合のあり方についても、改めて科學的分析が要求されつつある。

われわれの共同研究會においては、これまでの「マルクス主義的經濟帝國主義」論にとらわれることなく、世界史的かつ長期的な比較の立場に立って、「帝國」の原理と類型を整理・檢討しようとする。

研究會は原則として隔週月曜日に開催し、平均二つの報告と討論を行っている。なお、とりあえずは二年間をもって研究會を終了し、研究報告を

刊行する豫定である。

安定社會と言語　班長　横山　俊夫

人間社會の安定化と言語の變質とのかかわりの諸相を、生物群集の研究者とともに多面的に解明する。素材にはアジアやヨーロッパの宗教史、藝能史、文學史、科學史上の事例をえらぶ。この課題をかかげるのは現代の科學技術が個としての人間を萎縮させ、地球規模の閉塞社會をもたらしはじめたなかで、それをあかるい安定社會に變えうるのは言語ではないかとの想いからである。なお參考資料として、一七世紀後半の日本の色道論を輪讀している。

この研究は、話し言葉や名づけをめぐる試行的共同研究「言語力の諸相」（一九九七―九八）や「新發見事物への名づけをめぐる學内共同のこころみ」（一九九八）の成果をふまえるとともに、京都ゼミナールハウス主催「京都國際セミナー／安定社會の總合研究」（一九八九―九九）の蓄積を、さらに發展させることになるだろう。

日本の植民地支配―朝鮮と臺灣―　班長　水野　直樹

日本の植民地支配の全體像を解明することをめざして、朝鮮と臺灣における植民地政策の比較、日本の政治・經濟・社會などとの關連に重點を置いて、研究を進めている。日本史・朝鮮史・臺灣史などの研究者による共同研究として、研究の視點、資料の問題などに關して、情報・意見の交換を重ねている。

明治維新期の社會と情報　班長　佐々木　克

明治維新期は、おおまかに幕末の舊體制崩壞期と、明治の新國家建設期とに二分できる。しかし何れにしろ、變革期であり動亂期である。權力は動揺し、社會は流動化し人が激しく動き、そして噂・流説などさまざまな情報が飛びかう。そこで、權力も組織も人も、情報を求め、必要とし、かつ自らも發信してゆく。幕府や藩當局は、それぞれ獨自の情報蒐集システムを持っていた。しかし傳統のシステムだけでは、新たな狀況に對應出來なくなる。また幕府は政治や外交に關しては、情報統制を基本としてきたが、それが崩れて行く。そうしたなかで、知識人や在村のエリート達が、獨自のネットワークをもって、情報の蒐集・發信主體として登場し、權力の側は、彼らの存在を無視できなくなる。こうした狀況は基本的には、明治期に引き繼がれるが、新たな問題も登場する。それは明治政府が、權力が内包する根源的病として、情報を祕匿・隱匿しようとする基本的性格を維持しながら、一方で、政府は民衆に傳えなければならない情報を、如何に早くかつ廣く傳達・徹底させるか、すなわち情報公開という重要な課題に直面するのであり、こうした狀況のなかで、民衆自體も、新たな課題に就くことを迫られるのである。本研究は、以上のような實態をふまえて、明治維新という變革期における〈情報〉にかかわる諸問題を、總合的に檢討してみようと意圖しているものである。

アヴァンギャルド藝術の研究　班長　宇佐美　齊

一九九七年から二〇〇一年にいたる四年間の豫定で發足した共同研究班である。

二〇世紀初頭において藝術概念と表現理論とを大きく轉換させた、いわゆるアヴァンギャルド藝術を今日的な視點から總合的に再檢討することを主眼とする。その場合、文學・美術・音樂・演劇・映畫など諸ジャンル相互間の關わり、科學技術の進展、また政治經濟や社會の變動が及ぼした影響、そして思想史的なコンテクストなどに留意しなければならないことはもちろんであるが、同時にこの運動においては世界的な並行現象ないしは波及效果が見られる點を充分に考慮して、西ヨーロッパのみを視野に收めるのではなく、日本・中國・ロシア・アメリカ・その他の諸國との比較對照の視點をも重視しなければならないだろう。なお時代區分としては、二〇世紀初頭から三〇年代までを取り扱う。研究會は原則として隔週に開催し、すでに三年近くにわたって口頭發表と討議とを積み重ねてきたが、最終年度となる二〇〇〇年には論文執筆にとりかかり、二〇〇一年春には報告書の刊行を豫定している。

植民地主義と人類學　班長　山路　勝彦

人類學とその周邊諸科學の發展は、西歐による非西歐地域への政治・經濟的進出と密接に結びついていた。しかし、それは單純に人類學が植民地支配の道具であった、ということを意味しているのではない。また日本と東アジアを中心とする、植民地支配も多くの複雜な問題を含んでいる。こうした問いかけに答えるために當研究會が組織された。三年目は最終年度ということもあり、研究

成果の具體的な計畫を前提に議論を進めた。

空間と移動の社會史　班長　前川　和也

第二年目を迎えた本研究班では、前年度にひきつづきヨーロッパ、東アジア、西アジアの前工業化社會を中心として、人、もの、情報の移動の實態、そのような移動をひきおこした歴史状況、移動を規制するシステム、移動にともなう空間認識の變化などの問題を議論してきた。今年度は具體的には、「ディアスポラ」問題（一七世紀オランダのユダヤ人社會など）、廣域的な商業ネットワークの形成にともなう移動（中世の地中海貿易、スペイン・ポルトガルの世界制覇、オランダ・イギリスの東インド會社貿易、貿易のための近代的組織の形成、華僑・印僑の通商網）、人の移動と文化の傳播（啓蒙期の祕密結社、西歐への留學、藝能者の遍歴）、空間の認識と表象（古代メソポタミア、中世ヨーロッパの地理空間認識、啓蒙期フランスの旅行記、一九世紀英國の旅行者と旅行記）、特定の區域内で移動する社會集團の特質（遍歴職人、巡回裁判、托鉢修道士、「宿營社會」）などがとりあげられた。

テクストの政治學—危機の時代における理論・批評—　班長　上野　成利

二〇世紀の前半期は、近代的な人間諸科學の「危機」が表面化し、その克服をめぐる言説がさまざまな領域で浮上していった時代であった。しかしこれらの言説には、近代みずからが自己自身のありようを批判するという屈折した自己意識が、きわめて先鋭的なかたちで表現されていると いってもよいだろう。こうしたテクストのねじれを解きほぐしながら、それらの言説に刻印された近代的な思想の回路を明らかにし、それが近代社會のありようとどのように絡み合っているのかを檢證すること—これが本研究班の基本的なねらいである。具體的には、哲學、社會理論から科學論、さらには文學・藝術批評にいたるまで、當時「危機」をめぐって日本と歐米で書かれたさまざまな領域のテクストが、われわれの考察の對象となる。二年目にあたる本年は、主として一九三〇年代に日本で書かれたテクストを中心的に取り上げたが、同時にその歐米思想との交渉の動態にも注意を拂いながら檢討作業を進めている。

サーマヴェーダ基礎資料集成　班長　藤井　正人

ヴェーダ文獻の中で祭式歌詠を内容とするサーマヴェーダの文字資料を統一的に整理し編集することによって、サーマヴェーダの基礎資料を集成することがこの共同研究の目的である。未出版のジャイミニーヤ派サーマヴェーダの各種寫本を中心に研究を進めるが、他派の傳承をも對象に含める。文獻學、祭式學、音樂學をそれぞれの專門とする研究者の國際的な協力のもとに行なうサーマヴェーダの總合研究の第一段階として、サーマヴェーダ全體の總索引の出版を當面の目標としている。研究形態は、各班員が資料の擔當を分けて行なう分業と、班員間の作業の調整と内容の檢討を行なうミーティングの二つからなる。この研究班はサーマヴェーダに關する專門知識を次世代に傳えることも意圖しているので、若い研究者を班員に加えている。一年目の研究成果の一部を、第二回國際ヴェーダ學ワークショップにおいてパルポラが報告した。

ポルノグラフィー研究—エロスとその表象をめぐって—　班長　大浦　康介

本研究は、文學テクスト、繪畫、寫眞、映畫、ビデオなど、さまざまな媒體をつかった性表象の分析をつうじて、エロスの内實とその表象可能性や、それらの表象を横斷する〈主體〉、〈社會〉、〈民族〉、〈國家〉、〈性差〉、〈宗教〉、〈倫理〉などの問題を考えることを目的とする。近代ヨーロッパにおける「ポルノグラフィーの發明」をひとつの目安として、日本近現代の性表象・性文化や中國、アメリカの事例などを檢討しつつ、この分野でのあらたな理論的地平を模索したい。期間はさしあたり三年間、原則として月二回（隔週水曜日）の集まりを豫定している。

一七八九年人權宣言成立過程の研究　班長　富永　茂樹

この共同研究は「人間と市民の權利の宣言」の成立過程を詳細にたどりつつ、そこに現れた市民の概念を檢討することを目的としている。そのための手がかりとして、一七八九年に議會の内外で發表された數多くの人權宣言草案のうち著者や内容の點で重要と判斷されるテクストを選定し、その精確な翻譯を作成する作業をつづけ、さらに最終年度にあたる今年度の後半には一七八九年七—八月の國民議會での宣言をめぐる議論、とりわけ八月二〇日から二六日にかけて宣言の個々の條文

が成立するさいの討論過程にも詳しい検討を加えた。これらのテクストの讀解から明らかになったのは、近代市民社會の誕生の瞬間に、市民の權利と義務、所有、社會的結合などさまざまな問題をめぐって動員され、衝突しあいさもなくばすれ違う言説と觀念のダイナミスムである。豫定したテクストのほぼすべての翻譯が完了したので、今後はこれらの譯文を整理したのち、しかるべきかたちで刊行することをめざしている。

インド文化史の諸問題—テクスト傳承と寫本—　班長　井狩　彌介

南アジアのような多言語社會においてリンガフランカ（共通語）としてのサンスクリットのテクスト傳承を扱う場合、傳承の過程において生じる時間的要因（言語體系の歷史的變遷）と地域的要因（各地域における地方語音韻の影響と寫本文字の變容）とによるテクスト變容の可能性はつねに重要な檢討課題となる。本研究では、ヴェーダ文獻の傳承、特に南インド・ケララ地域の寫本と口頭傳承資料に焦點をあて、ヴェーダ文獻傳承の諸特徴を分析しつつテクストの批判刊本を作成するために必要な前提知識を總括する。

進化論を讀む　班長　阪上　孝

ダーウィン「種の起源」の刊行以來、〈進化論〉は人文・社會科學の領域にまで大きな影響を與え、近代科學全般にパラダイム・シフトをもたらした。〈進化論〉を手がかりにすることで、近現代の知識と社會にふくまれる問題性を解明することも可能となろう。こうして本研究班は〈進化論〉をめぐる基本的なテクストを讀むことを主眼に活動を進めてきた。ダーウィン、ラマルク、マルサス、スペンサー、ヘッケル、ハクスリーなどの主要な文獻についてはすでに檢討を終え、班員のあいだである程度の知見を共有することができた。そこで本研究班の一年間の活動を締めくくるにあたって、最後に〈進化論〉の科學史的な位置について檢討を加えた。次年度には、これまでの作業を足がかりに「進化論と社會」を主題とする本格的な共同研究を始めることを豫定している。

「進化論」と社會　班長　阪上　孝

〈進化論〉の影響がたんに自然科學の領域にとどまるものではないことは、「生存鬪爭」や「適者生存」といった用語が短期間のうちに多くの社會に普及していった事實をみれば明らかであろう。しかし進化論的な思考樣式は、そうした表層的な次元だけでなく、一九世紀後半以降の社會と學問の枠組みそのものに深く根を下ろしている。〈進化論〉がさまざまな社會と學問分野でどのように理解され、受容され、批判されていったのかを比較檢討することで、近現代の社會・文化・學問のありかたは、その問題性もふくめて明らかになるにちがいない。こうして本研究班では、前年度の「進化論を讀む」班での到達點をふまえつつ、〈進化論〉受容の社會的・文化的文脈を探るべく、〈進化論〉の影響の諸樣態について廣く檢討することにした。現在、哲學・精神醫學・社會學・優生學といった學問分野ごとの受容を縱軸に、日本・アメリカ・ヨーロッパといった地域ごとの受容樣態を橫軸に据えながら、〈進化論〉の受容と批判のありかたについて討議を重ねている。また、それと並行して、共通の問題意識を高め、論點を明確化するために、〈進化論〉にまつわるトピックを各自が持ち寄る機會をもうけた。次年度もこれまでの研究報告・討議を繼續しながら、「進化論と社會」をめぐる問題點をさらに探ってゆく豫定である。

個人研究

東方部

六朝隋唐精神史　吉川　忠夫
中國近代社會思想研究　狹間　直樹
南アジア亞大陸北西地方の歷史考古學研究　桑山　正進
中國古代の傳承文化研究　小南　一郎
原始佛教起源論　荒牧　典俊
中國美術の樣式と意味　曾布川　寬
中國建築の樣式・技術・空間　田中　淡
近代中國の綿紡織業　森　時彥
道教思想研究　麥谷　邦夫
敦煌寫本の言語史的研究　高田　時雄
新漢字コード系の構築　勝村　哲也
中國古代中世の法制　冨谷　至
先秦時代の金文　淺原　達郎
中國の小說、演劇及び講唱文學の演變　金　文京
清代の文化と社會　井波　陵一

古代中國の考古學研究　岡村　秀典
中國科學の基礎理論　武田　時昌
近世中國の財政と社會　岩井　茂樹
川西走廊の漢藏諸語の記述言語學的研究　池田　巧
中國中世學術史の研究　木島　史雄
中國小學史　森賀　一惠
中國佛教美術の研究　稲本　泰生
前近代朝鮮の政治制度と社會制度　矢木　毅
ムガル朝時代の歴史敍述の研究　眞下　裕之
中國近代の社會・文化構造　高嶋　航
中國隋唐期における疾病認識―『諸病原候論』を軸に―　東郷　俊宏
魏晉南北朝時代の注釋學　古勝　隆一
中國近世の國家支配の研究　古松　崇志
日本部
一九世紀における明治維新　佐々木　克
「日本植民地帝國」の經濟史的研究　山本　有造
前近代日本の文明史的研究　横山　俊夫
近代東アジアにおける日本の法と政治　山室　信一
近代朝鮮の政治と社會　水野　直樹
戰前期日本の工業化と華僑ネットワーク　籠谷　直人
近代天皇制の文化史的研究　高木　博志
士族の研究　落合　弘樹
ドイツ國家學と近代日本　瀧井　一博
近代日本の言語政策　安田　敏朗
江戸時代天文暦學の文化史的研究　小林　博行
近代日本民俗誌システムの研究　菊池　曉
西洋部
知識と社會制度　阪上　孝
シュメール行政・經濟文書の研究　前川　和也
古代インド・ヴェーダ祭式の構造と歴史的展開の研究　井狩　彌介
フランスの詩學　宇佐美　齊
フランス革命と近代的主體の成立　富永　茂樹
南アジアの宗教と社會　田中　雅一
文學理論の研究　大浦　康介
後期ヴェーダ文獻の成立史研究―ブラーフマナからウパニシャッドへ―　藤井　正人
初期近代ポーランドの政治文化　小山　哲
人種・エスニシティ論　竹澤　泰子
フランクフルト學派の政治思想　上野　成利
中世イタリアの「家」　高田京比子
共和國の法と道德―フランス第三共和政期における共和思想と新カント派―　北垣　徹
ポール・ヴァレリーと二〇世紀フランスの思想　森本　淳生
南アジア・ムスリム社會の社會構造　小牧　幸代

東方部研究會

東方學報第七十一册合評會
一〇月二七日　木島論文　池田　巧
一二月　一日　小南論文　古勝　隆一
吉川論文　東郷　俊宏

事業概況

夏期公開講座―時のデザイン
七月九日
明治維新と古代文化の復興　高木　博志
漢元年の惑星集合　淺原　達郎
七月一〇日
臨床醫學における時間の知―中國醫學の窓から―　東郷　俊宏
創造のとき・進化のとき―ダーウィンを中心に―　阪上　孝

開所七十周年記念公開講演會
一一月一八日
中國近代における帝國主義と國民國家　狹間　直樹
西學の傳來と明清時代の實學思想　杜　石然
時間解釋と日本の影響―中國近代における過去・現在・未來の概念―　マリアンヌ・バスチドブルギエール

一九九九年度漢籍擔當職員講習會（漢籍電算處理）
第一日（九月二七日）
圖書館と情報システム（講演）　大型計算機センター教授　金澤　正憲
東洋學文獻類目の編纂とフォーマット（講義）　村田　康彦

東洋學文獻類目册子體の作成（講義）
大型計算機センター教授　金澤　正憲
大型計算機センター技官　河野　典
研究者の電子メディア利用（講義）
慶應義塾大學教授　上田　修一
第二日（九月二八日）
漢字コード―外字の處理―（講義）
大型計算機センター教授　金澤　正憲
大型計算機センター技術專門職員　小澤　義明
電子漢字（ekanji）とその屬性（講義）
同志社女子大學非常勤講師　丹羽　正之
オープンシステムでの東洋學データベースの構築（講義・實習）
大型計算機センター助教授　安岡　孝一
データベース檢索（一）（實習）
第三日（九月二九日）
情報ネットワークとインターネット（講義）
大型計算機センター教授　金澤　正憲
大型計算機センター技術專門職員　櫻井　恆正
最近のデータベースの動向（講義）
大型計算機センター助手　川原　稔
データベース檢索（二）（實習）
第四日（九月三〇日）
抄本（古文書）の書像データベース（講義）
大阪市立大學教授　柴山　守
テキストデータベースの流通について（講義）
國文學研究資料館助教授　伊藤　鐵也
データベース檢索（三）（實習）
第五日（一〇月一日）
WWW による情報サービス（講義）
大型計算機センター助教授　澤田　篤史
學術情報センター總合目錄における中國書目錄（講義）
學術情報センター教授　宮澤　彰
質疑應答　勝村　哲也

一九九九年度漢籍擔當職員講習會（初級）

第一日（一一月八日）
漢籍の話（講演）　大谷大學教授　竺沙　雅章
目錄法（講義）　梶浦　晉
實習（一）
第二日（一一月九日）
子部（講義）　東京大學教授　丘山　新
實習（二）
第三日（一一月一〇日）
史部（講義）　冨谷　至
實習（三）
第四日（一一月一一日）
經部（講義）　古勝　隆一
實習（四）
第五日（一一月一二日）
集部（講義）　鹿兒島大學助教授　高津　孝
質疑應答　高田　時雄

所員動靜

・谷井陽子（東方部）助手は、辭任の上、（三月三一日付）天理大學講師に就任。
・濱田麻矢（東方部）助手は、神戸大學文學部講師に昇任（四月一日付）。
・山本有造（日本部）教授を、當研究所長及び附屬東洋學文獻センター長に併任（四月一日～八月三一日）。
・山路勝彥關西學院大學教授は、併任教授（比較文化研究部門、四月一日～二〇〇〇年三月三一日）。
・塚本明三重大學人文學部助教授は、併任助教授（比較文化研究部門、四月一日～二〇〇〇年三月三一日）。
・竹澤泰子筑波大學助教授は、當研究所助教授（西洋部）に轉任（四月一日付）。
・池田巧立教大學助教授を當研究所助教授（東方部）に採用（四月一日付）。
・菊地曉氏を助手（日本部）に採用（四月一日付）。
・稻本泰生（東方部）助手は、奈良國立博物館學藝課に轉任（五月一日付）。
・古松崇志氏を助手（東方部）に採用（五月一六日付）。
・桑山正進（東方部）教授を、當研究所長及び附屬東洋學文獻センター長に併任（一一月一日～二〇〇一年一〇月三一日）。
・勝村哲也教授（附屬東洋學文獻センター）は、文部省科學研究費補助金により、平成一一年一月二日大阪發、タマサート大學に於いて日・タイ間の通信回線利用狀況の調査ならびに漢字の國際的流通に関する協議を行い、一月六日歸國。

・勝村哲也教授（附屬東洋學文獻センター）は、文部省科學研究費補助金により、一月一六日大阪發、中央研究院に於いて漢字の國際的利用に關する協議を行い、一月二〇日歸國。
・高田時雄教授（東方部）は、平成一〇年一二月一三日大阪發、高等研究學院に於いて敦煌の言語生活に關する研究及び講演を行い、一月二一日歸國。
・小牧幸代助手（西洋部）は、委任經理金により、平成一〇年一一月二四日大阪發、ジャマーアテ・イスラーミー組織本部・支部に於いて大衆的イスラーム運動の動向研究および資料收集を行い、二月八日歸國。
・眞下裕之助手（東方部）は、一月三一日大阪發、ラームプル・ラザー圖書館に於いてペルシア語寫本調査、ムンシラームマノハルラールに於いてインドイスラム史に關する資料收集を行い、二月一五日歸國。
・金　文京助教授（東方部）は、文部省科學研究費補助金により、二月二二日大阪發、ソウル大學中國文學科に於いて孝子說話研究についてのレビューを受け、二月一五日歸國。
・岡村秀典助教授（東方部）は、文部省科學研究費補助金により、三月四日大阪發、河南省文物考古研究所、焦作市文物工作隊に於いて府城遺跡の發掘調査を行い、三月一八日歸國。
・勝村哲也教授（附屬東洋學文獻センター）は、文部省科學研究費補助金により、三月九日成田發、ハーバード大學、UCバークレイ校に於いて漢字の國際的利用に關する國際會議に出席し、中國古籍・中國古地圖史料の調査を行い、三月一八日歸國。
・東郷俊宏助手（東方部）は、三月一四日大阪發、北京中醫藥大學、中醫研究院に於いて中國金元期醫學書、本草書に關する研究資料收集、崑崙飯店に於いて老中醫臨床技術の調査を行い、三月二一日歸國。
・勝村哲也教授（附屬東洋學文獻センター）は、三月二八日大阪發、中央研究院歷史語言研究所に於いてデータ交換について打合せならびにデータの交信實驗を行い、三月三〇日歸國。
・岡村秀典助教授（東方部）は、文部省科學研究費補助金により、四月四日大阪發、焦作市文物隊に於いて府城遺跡の調査、中國社會科學院考古研究所に於いて調査結果の檢討を行い、四月一八日歸國。
・高田京比子助手（西洋部）は、四月二二日大阪發、ヴェネツィア市內に於いて中世ヴェネツィア及びヴェネツィアの東地中海植民地に關する史料調査及び意見交換、クレタ島に於いて中世ヴェネツィアの東地中海植民地（クレタ島）に關する資料調査を行い、五月八日歸國。
・桑山正進教授（東方部）は、五月七日大阪發、マクマスタ大學に於いてガンダーラ佛教研究國際集會に出席し、五月一四日歸國。
・岡村秀典助教授（東方部）は、文部省科學研究費補助金により、五月五日大阪發、焦作市文物隊に於いて府城遺跡の調査、河南省文物考古研究所に於いて調査結果の檢討を行い、五月一六日歸國。
・籠谷直人助教授（日本部）は、五月三一日大阪發、中央研究院近代史研究所に於いて學術講演會參加及び發表、中央圖書館臺灣分館に於いて資料調査を行い、六月二日歸國。
・勝村哲也教授（附屬東洋學文獻センター）は、六月一三日大阪發、中央研究院にいて漢籍電子文獻協調委員會に出席し、六月一七日歸國。
・古勝隆一助手（東方部）は、六月一三日大阪發、中央研究院に於いて漢籍電子文獻協調委員會に出席し、六月一七日歸國。
・竹澤泰子助教授（西洋部）は、文部省科學研究費補助金により、六月二三日成田發、全米日系博物館に於いて國際日系研究調査プロジェクト會議に出席、カリフォルニア大學ロサンジェルス校、同バークレー校に於いて人種理論に關する資料收集を行い、七月八日歸國。
・金　文京助教授（東方部）は、七月一五日大阪發、中央研究院に於いて世變與維新：晚明與晚清的文學藝術檢討會に出席、論文發表を行い、七月一八日歸國。
・勝村哲也教授（附屬東洋學文獻センター）は、文部省科學研究費補助金により、八月七日大阪發、デンマーク王立圖書館に於いてグリーンステッド等によって電子化された資料の調査と收集を行い、八月一二日歸國。
・池田　巧助教授（東方部）は、文部省科學研究費補助金により、八月一五日大阪發、中國藏學

研究中心に於いて安多語の調査研究を行い、八月二九日歸國。

・冨谷　至助教授（東方部）は、委任經理金により八月一五日大阪發、國立民族學博物館、國立博物館、ライデン大學に於いて研究打合せ及び研究調査を行い、八月二五日歸國。

・高木博志助教授（日本部）は、八月二六日大阪發、瀋陽、長春、大連市内に於いて近代國家と民衆統合に關わる現地調査を行い、八月二九日歸國。

・岡村秀典助教授（東方部）は、文部省科學研究費補助金により、八月一六日大阪發、陝西歴史博物館、西北大學、陝西省考古研究所に於いて江南系玉器の調査、焦作市文物工作隊に於いて府城遺跡出土品の調査、北京大學に於いて調査成果の檢討を行い、九月三日歸國。

・荒牧典俊教授（東方部）は、八月二一日大阪發、ローザンヌ大學に於いて國際佛教學會に出席、ベルリン博物館、ハンブルク大學に於いて資料收集を行い、九月三日歸國。

・勝村哲也教授（附屬東洋學文獻センター）は、文部省科學研究費補助金により、八月二八日大阪發、科學アカデミーナツアグドル博物館に於いて中露蒙に關わる資料收集と情報轉送實驗を行い、九月四日歸國。

・前川和也教授（西洋部）は、七月二八日大阪發、大英博物館に於いて大英博物館シュメール行政・經濟文書の研究を行い、九月七日歸國。

・冨谷　至助教授（東方部）は、文部省科學研究費補助金により、九月三日大阪發、南京博物院、上海博物館に於いて新出文字資料に關する最初情報の收集と調査を行い、九月七日歸國。

・水野直樹助教授（日本部）は、九月三日成田發、ロシア現代史資料研究保管センターに於いて朝鮮關係コミンテルン文書の調査を行い、九月一七日歸國。

・森　時彦教授（東方部）は、九月五日大阪發、中國社會科學院近代史研究所に於いて學術講演、交流及び資料收集を行い、九月一六日歸國。

・小山　哲助教授（西洋部）は、文部省科學研究費補助金により、九月一五日大阪發、ワルシャワ大學歴史學研究所、ワルシャワ國立圖書館、チャルトリスキ公家圖書館に於いて貴族共和制期ポーランドにおける國政改革論に關する現地研究者との情報交換及び資料調査を行い、九月二八日歸國。

・籠谷直人助教授（日本部）は、九月二八日大阪發、シンガポール大學に於いて南洋協會刊行史料の調査及び「日本と東南アジアの關係」國際會議に出席し、一〇月三日歸國。

・高木博志助教授（日本部）は、文部省科學研究費補助金により、九月二七日大阪發、ニューヨーク大學文學科、コロンビア大學東アジア研究所、プリンストン大學に於いて日米共同研究に關する打合せを行い、ハーバード大學ライシャワー研究所に於いて「一九五〇年代の諸問題」をめぐるシンポジウムに出席し、一〇月五日歸國。

・籠谷直人助教授（日本部）は、一〇月一五日大阪發、延世大學國際大學院に於いて「アジア通商網と近代日本との關係一八八〇―一九四〇」に關する研究、資料收集を行い、一〇月一八日歸國。

・高田時雄教授（東方部）は、一〇月一八日大阪發、中正大學に於いて「言語學と漢文佛典について」の講演會に出席し、一〇月二六日歸國。

・勝村哲也教授（附屬東洋學文獻センター）は、一〇月二六日大阪發、The National Academy of the Korean Language に於いて電算處理に關する國際ワークショップに出席し、一〇月二九日歸國。

・岡村秀典助教授（東方部）は、文部省科學研究費補助金により、一〇月一九日大阪發、山東省博物館、北京大學等に於いて遺址、玉器の調査・打ち合わせを行い、一一月四日歸國。

・大浦康介助教授（西洋部）は、一一月七日大阪發、中國京劇院に於いて日佛共同演劇プロジェクトへの參加及び京劇研究のための資料收集を行い、一一月一一日歸國。

・田中雅一助教授（西洋部）は、文部省科學研究費補助金により、一一月九日大阪發、シンガポール大學、マカラ國立大學に於いてインド人移民の調査を行い、一一月二二日歸國。

・眞下裕之助手（東方部）は、文部省科學研究費補助金により、一一月二〇日大阪發、大英圖書館、王立アジア協會に於いてチャガタイ・トル

コ語、ペルシア語文獻の諸寫本研究を行い、一二月一日歸國。

・横山俊夫教授（日本部）は、文部省在外研究員旅費により、一〇月六日大阪發、ケンブリッジ大學、オックスフォード大學に於いて前近代日用百科書の日英比較研究に關する資料調査を行い、一二月五日歸國。

・森賀一惠助手（東方部）は、一一月三〇日大阪發、フランス科學研究センター、フランス社會科學院、東アジア言語研究所に於いて甲骨文發現百周年記念國際會議において報告を行い、一二月四日歸國。

・高嶋　航助手（東方部）は、一一月三〇日大阪發、第一歷史檔案館、南京圖書館に於いて清代裁判・財政文書の閲覽及び收集、上海圖書館に於いて民國期新聞の閲覽收集を行い、一二月一四日歸國。

・大浦康介助教授（西洋部）は、一二月九日大阪發、香港大學に於いて「香港の中の日本／日本の中の香港」に關する研究集會に出席し、一二月一二日歸國。

・田中雅一助教授（西洋部）は、一二月九日大阪發、香港大學に於いて「香港の中の日本／日本の中の香港」に關する研究集會に出席し、一二月一二日歸國。

・小牧幸代助手（西洋部）は、文部省科學研究費補助金により、一二月一〇日大阪發、パキスタン國立言語學研究所に於いてパンジャーブ州における言語とイスラーム化の問題に關する調査、科學アカデミー歷史研究所に於いてウズベキスタンにおけるイスラーム化の問題に關する調査、ウルドゥー語學研究所に於いてパンジャーブ州における言語とイスラーム化の問題に關する調査、ジャマーアテ・イスラミー　イスラマバード支部に於いてパキスタンにおけるイスラーム化の問題に關する調査を行い、一二月二七日歸國。

・勝村哲也教授（附屬東洋學文獻センター）は、文部省科學研究費補助金により、一二月一六日大阪發、國立國語研究院に於いて朝鮮文獻の集成に關する研究打ち合わせと成果とりまとめを行い、一二月一八日歸國。

・高田時雄教授（東方部）は、一二月一六日大阪發、北京大學歷史系に於いて中西交涉史に關する研究及び講演を行い、一二月三〇日歸國。

外國人研究員

・Lambert Schmithausen　ハンブルク大學教授
楞伽經の哲學と環境倫理（日本學客員部門）
受入教官　荒牧教授
期間　一月一八日～四月二三日

・Asko Parpola　ヘルシンキ大學教授
サーマヴェーダの文獻と傳承（比較社會客員部門）
受入教官　藤井助教授
期間　二月一日～一二月二〇日

・Antony Martin Best　ロンドン大學國際關係史學部專任講師
一九三〇年代の日英間の相互認識と脅威の本質（日本學客員部門）
受入教官　籠谷助教授
期間　七月一日～二〇〇〇年四月三〇日

招聘外國人學者

・Takashi Fujitani　カリフォルニア大學サンディエゴ校歷史學部準教授
太平洋戰爭における民族的マイノリティ出身兵士の比較研究
受入教官　水野助教授
期間　一月一二日～三月二五日

・金　慶南　釜山大學校韓國民族文化研究所研究助教
一九三〇―四〇年代における朝鮮の綿紡績工業化と勞働力再生產
受入教官　水野助教授
期間　四月一日～一〇月三一日

・馬　彪　北京師範大學歷史學部助教授
後漢政治史の研究
受入教官　冨谷助教授
期間　四月一日～二〇〇〇年三月三一日

・Kristine Dennehy　カリフォルニア大學ロスアンジェルス校歷史學部博士課程
戰後日本における植民地朝鮮の記憶
受入教官　水野助教授
期間　四月一日～二〇〇〇年三月三一日

・J. Marie Creamer　イリノイ大學人類學研究科博士課程
日本女性の海外旅行體驗の調査
受入教官　田中助教授
期間　七月六日～八月二七日

・O. Franck Venture　パリ第七大學東アジア研究科博士課程

出土資料による殷周史の研究
受入教官　高田教授
期間　七月六日～八月二七日

・張　東翼　慶北大學校師範大學歴史教育科教授
宋・高麗交渉史料の收集と研究
受入教官　冨谷助教授
期間　九月一日～二〇〇〇年八月三一日

・G. Aurora Testa　イタリア國立東方學研究所員
唐代洛陽城の考古學的研究
受入教官　桑山教授
期間　九月二〇日～二〇〇〇年九月一九日

・F. Daniel Voegeli　ローザンヌ大學文學部博士課程
ヴァードゥーラ・シュラウタスートラ第五章（動物犠牲祭）の研究
受入教官　井狩教授
期間　一一月一日～二〇〇〇年一〇月三一日

・王　才强　國立シンガポール大學建築系準教授
唐長安城と日本の都市・建築の研究
受入教官　田中教授
期間　一一月一五日～二〇〇〇年二月一四日

・李　範文　寧夏社會科學院研究員
西夏語および中期中國語の研究
受入教官　高田教授
期間　一二月一日～一二月一四日

・鍾　少華　北京社會科學院研究員
日中百科全書の研究
受入教官　狹間教授
期間　一二月五日～二〇〇〇年四月二日

外國人研究生

・吳　瑞雲
一九五〇年代日本臺灣關係に關する研究
受入教官　籠谷助教授
期間　四月一日～二〇〇〇年三月三一日

・Johnson Justin Cale
シュメール語學と經濟の歴史
受入教官　前川教授
期間　一〇月一日～二〇〇〇年九月三〇日

出版物

紀要

人文學報　第八十二號（紀要第一三五册）
一九九九年三月三〇日刊

東方學報　第七十一册（紀要第一三六册）
一九九九年三月二六日刊

ZINBUN（歐文紀要）　第三三號
一九九九年三月刊

東洋學文獻類目　一九九六年度
附屬東洋學文獻センター編
一九九九年二月二六日刊

研究報告その他

所報人文　第四五號
一九九九年三月三一日刊

所報人文　第四六號　創立七〇周年記念
一九九九年一一月一八日刊

東洋學文獻センター叢刊第八册
京都大學人文科學研究所所藏中江丑吉文庫目錄
山室信一編
一九九九年三月二五日刊